

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (6)

久 居 宣 夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (6)

Nobuo Hisai*

は じ め に

今回は、1993年1月～1993年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報(久居, 1993)までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)中で、r: “稀”、または(r): “古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日(日付のないものはふつうに見られることを示す)と目撃または捕獲地点と目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、種々のご教示と同定をしていただいた東洋大学の太田正男教授、国立科学博物館動物研究部の友国雅章氏、日頃より貴重な記録を提供していただいている日本野鳥の会の守田洋氏をはじめ、情報を提供くださった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

Acanthosoma forficula Jakovlev ヒメハサミツノカメムシ(半翅目 ツノカメムシ科)(1993.9.3 建物跡地) 友国雅章氏同定

建物跡地(図1参照)の草上にいる個体を捕獲。

本種の国内での分布は北海道～九州と広い(安永他, 1993)が、日浦(1977)によれば山地性でブナ帯に生息するという。本種はミズキ・クマノミズキ・ウコギ・サンショウ・ツタウルシなどの実を吸汁する

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

(日浦, 前出; 安永他, 前出)。本園にはミズキが多く生育していることから、園内ではこれをおもな寄生植物として発生しているものと考えられる。

本種は広く分布するが、生息密度は低いらしく、各地の採集記録でも個体数は少ないという(鈴木, 1981; 高橋, 1985)。

本種と同属の *A. labiduroides* Jakovlev ハサミツノカメムシは1991年に本園でも捕獲されている(久居, 1993)が、「昆虫目録」(鶴田他, 1952)に記載されている *A. denticaudum* Jakovlev セアカツノカメムシは現在のところ未見である。

2. 稀 種 の 記 録

(1) 昆 虫 類

Ceriagrion melanurum Selys キイトンボ(蜻蛉目 イトンボ科) (1993.8.28 水生植物教材園 守田洋氏)

本種は15年程前の記録では、園内でも多産していた(頼, 1978)。しかし、その後は毎年のように発生するものの個体数は減少し、特にここ数年はその傾向が著しい。この原因は前報(久居, 1993)でも指摘したように、おもな発生地である水生植物教材園のアサザ植栽地付近が時々枯渇するなど、本種の幼虫の生息環境としてはかなり不安定なためと考えられる。

Copera annulata Selys モノサシトンボ(蜻蛉目 モノサシトンボ科) (1993.7.14 水鳥の沼)

本種是水鳥の沼で数個体が本園職員によって目撃され、同日、そのうちの1個体(雄)を捕獲した。

本種も「昆虫目録」(鶴田他, 前出)に記載されているが、その後長期間目撃されなかったトンボの一種である。そして、数年にわたる頼氏の緻密な調査にもかかわらず、本種の目撃記録は皆無であった(頼, 1978)。そのため、「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)では絶滅種として扱われた。本種は、その後1985年に再見された(頼, 1986)が、今回水鳥の沼で目撃されるまで再度記録が途絶えていたものである。

国内では北海道～九州、佐渡島・

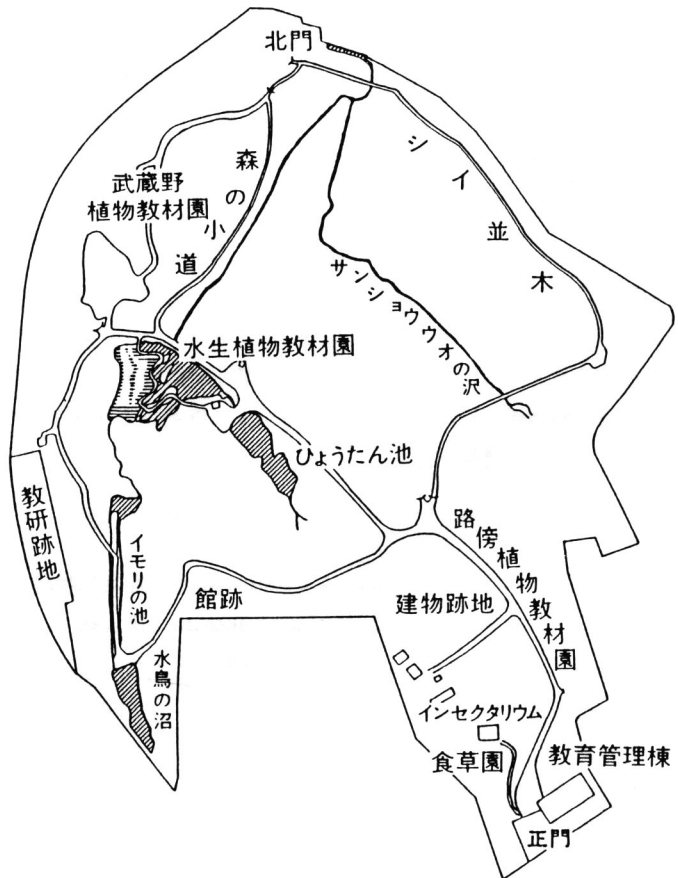


図1 自然教育園概略図

壱岐・対馬などに広く分布する。幼虫はおもに平地や丘陵地の樹陰が多く、挺水植物が繁茂する富栄養的な池沼に生息し、また市街地の社寺のあまり入手のはいらない境内の池でも、しばしばかなりの個体が観察されるという(浜田・井上, 1985; 石田他, 1988)。

本園は、本種が十分に発生できる環境条件にあると考えられるが、これまでの記録から推測すると、むしろ近隣地域にある多くの社寺で発生した個体が飛来したものであろう。

Orthetrum japonicum japonicum Uhler シオヤトンボ(蜻蛉目 トンボ科) (1993.5.8 食草園)

本種は毎年ではないが、5月頃に時々目撃される。本種もこれまでの記録から推測すると、園内へは他所で発生した個体が飛来したのと考えられる。

幼虫は平地および丘陵地の湿地や水田、緩流などに生息する。

Mantispa japonica MacLachlan ヒメカマキリモドキ(脈翅目 カマキリモドキ科) (1993.7.9 インセクトリウム)

前回の記録(久居, 1993)と同様にインセクトリウム内にいる個体を捕獲。本種の幼虫が寄生するとされているエドコマチグモは正体不明である(久居, 前出)。本園では*Chiracanthium japonicum* Börs et Str. カバキコマチグモと*C. lascivum* Karsch ヤマトコマチグモの2種が記録されている。しかし、これらのコマチグモ類が本種の幼虫の寄主か否かは明らかではない。

Antigius attilia Bremer ミズイロオナガシジミ(鱗翅目 シジミチョウ科) (1993.6.10 食草園)

今回は、インセクトリウム付近の林縁で羽化直後の新鮮な個体が目撃された。この記録により本種の園内での繁殖が確認された。

本種も毎年のように観察されるが、個体数はきわめて少ない。主要な食餌植物はコナラとされており(福田他, 1984)、今回目撃された個体もインセクトリウム付近に生育するコナラで発生したものであろう。本種の分布は北海道～九州であり、平地の雑木林にふつうに生息し、都市内に残存する小規模な林にも生息する(福田他, 前出)。そして、かつて都内にも多く生息していたと考えられるゼフィルス的一种である(例えば、戸田, 1973)。しかし、近年都内では減少の著しいチョウの一種と考えられており、1980年以降に生息が確認されているのは、東京23区では本園の位置する港区のほか練馬区・杉並区・目黒区・世田谷区・板橋区である(久保田, 1993)。このうち世田谷区では、少なくとも1987年までは記録されている(福田, 1988)。

Rapala arata Bremer トラフシジミ(鱗翅目 シジミチョウ科) (1993.8.20 イモリの池 守田洋氏)

本種もミズイロオナガシジミと同様に都内では減少の著しいチョウの一種であり、1980年以降に生息が確認されているのは練馬区・杉並区・世田谷区・目黒区・大田区・港区・千代田区である(久保田, 前出)。本園でも個体数は少ないが、毎年のように夏季に目撃される。

Parantica sita Kollar アサギマダラ(鱗翅目 マダラチョウ科) (1993.5.4 坂本直樹氏; 同10.12 教研跡地)

本種は園内に飛来した個体が、毎年1～2回目撃される。10月の記録は、教研跡地のタイアザミで吸

蜜していたものである。

Cyphonocerus ruficollis Kiesenwetter ムネクリイロボタル(鞘翅目 ホタル科) (1993.6.12 路傍植物教材園) 大野正男氏同定

本種は本州～九州に分布し、本園の「昆虫目録」(鶴田他, 前出)にも掲載されているが、その後全く目撃されていなかったことなどから、ここに記録しておく。

本種は、都内でも本園のようにかなりまとまった面積が残存する緑地には生息する可能性もあるが、大野正男氏が以前調査した都内数十箇所の公園緑地では、生息が確認されていない。したがって、本種は、都市域では自然環境が比較的良好に保存されている緑地の指標にもなりうると考えられるという(大野正男氏のご教示による)。

本種が多数発生する生息環境は、神奈川県で調査された例では逗子市池子付近の山地に隣接する地域や、横浜市緑区のスギを主とした林などが知られており(大場, 1976; 神奈川県立市ヶ尾高校生物部, 1981)、このように山林などに隣接する林縁や林床の草地のやわらかく湿潤な土壌に生息する(大場, 1986)。

幼虫は陸上性で、*Allopeas clavulinum Kyotoense* Pilsbry et Hirase オカチョウジガイなどの陸生貝を摂食する(大場, 1986)。

引用文献

- 福田晴男. 1988. 移りゆく東京のチョウ. 「都市の昆虫誌」(長谷川仁編), 135-178. 思索社, 東京.
- 福田晴夫他 8 名. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ). 373pp. 保育社, 大阪.
- 浜田 康・井上 清. 1985. 日本産トンボ大図鑑. 第2巻解説編:129-291. 講談社, 東京.
- 久居宣夫. 1993. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(5). 自然教育園報告, (24):1-8.
- 日浦 勇. 1977. 半翅目(異翅亜目). 「原色日本昆虫図鑑(下)」, 全改訂新版(伊藤修四郎他編), 95-129. 保育社, 大阪.
- 石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 72pls+105figs+140pp. 東海大学出版会, 東京.
- 神奈川県立市ヶ尾高校生物部. 1981. ムネクリイロボタルの室内飼育報告. 昆虫と自然, 16(12):32.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 久保田繁男. 1993. 東京都における都市化と蝶類の衰亡. 昆虫と自然, 28(12):5-10.
- 大場信義. 1976. ムネクリイロボタルの形態と活動習性について. 横須賀市博物館研究報告(自然科学), (23):35-43.
- . 1986. ホタルのコミュニケーション. 241pp. 東海大学出版会, 東京.
- 頼 惟勤. 1978. 自然教育園の蜻蛉の目撃記録. 自然教育園報告, (8):60-71.
- . 1986. 自然教育園の蜻蛉成虫観察報告(1975年度) 特にホソミオツネントンの行動. TOMBO, XXIX(3~4):107-110.
- 鈴木 裕. 1981. 神奈川県内の異翅半翅類. 「神奈川県昆虫調査報告書」(神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編), 189-213. (神奈川県教育委員会).

高橋寿郎. 1985. 神戸大橋上にオオツノカメムシが多数飛来. 月刊むし, (167):32.

戸田晴彦. 1973. 東京大田区のゼフィルス 2 種. 月刊むし, (28):55.

鶴田 総一郎他. 1952. 国立自然教育園動物目録第 1 集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1):1-42.
(国立自然教育園).

安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫. 1993. 日本原色カメムシ図鑑(友国雅章監修).
380pp. 全国農村教育協会, 東京.